

胸を張って

西郷村立西郷第一中学校 1年 大川原 葉月

私が二才の時、祖母は突然脳出血で倒れました。それまで祖母は元気で、よく私と兄を公園に連れて行ってくれたり、野菜の皮むきを手伝わせてくれたりするととても優しい人でした。私には、その時のことをはっきり覚えている記憶はありません。物心がついたときには、祖母はもう車いすに座って生活していました。左半身が動かさない片麻痺という障害が残り、歩くことや料理することも少し難しくなってしまったのです。

私にとって、車いすの祖母は当たり前前の姿でした。だから、小さい頃の私は、車いすを特別なものだと思った事はありませんでした。車いすに乗っている人を見ても「かわいそう」とか「大変そう」と感じることもなく、むしろ「おばあちゃんと同じだ」「あの車いすかっこいいな」と思ったりしていました。祖母はいつも笑顔で、

「よーし、ドライブね。」

と言って、私を膝に乗せて一緒に廊下を進んでくれたことを覚えています。

しかし、小学校に入ってから、私は少しずつ現実を知るようになりました。それはある年の運動会でのことです。車いすに乗って応援にきた祖母に「おばあちゃんだ」と手を振りました。すると、近くにいた知らない大人が二人小さな声で言いました。

「あんな姿になっても運動会に来たいのかね」

私はその言葉を聞いた瞬間、とても不思議な気持ちになりました。祖母は確かに歩けません。麻痺もあり車いすに乗っています。でも祖母は毎日笑顔で、私の運動会をととても楽しみにしてくれていました。それなのにどうして「あんな姿」と言われなければならないのか、当時の私は理解できませんでした。その後も何度か同じような場面に出会い、そのたびに胸がギュッと苦しくなりました。

祖母自身も、人から心無い言葉をかけられたことがあったそうです。「思うように動けなくて大変ね」とか「それだと孫の面倒を見られないね」などと言われ、笑顔で返していても、心の中では深く傷つき涙を流した日もあったと母から聞きました。その話を聞いたとき、私は悔しくてたまりませんでした。ある日突然病気で体が不自由になってしまい一番つらかったのは祖母自身だと思います。祖母はただ少し体が不自由なだけで、他の誰かより劣っているわけではありません。人として同じように尊重されるべきなのに、どうしてそんな言葉を言われなければいけないのでしょうか。

私はその時はじめて「人権」という言葉を意識しました。人権とは、生まれながらにして誰もが持っている大切な権利です。生きる権利、自由に考えたり話したりする権

利、差別されない権利。でも、祖母に向けられた心無い言葉は、その人権を軽く見ているのではないかと思います。

人は、見た目や体の状態だけで判断されるべきではありません。歩けないからと言ってその人の価値が下がる事なんて絶対にありません。祖母はいつも、

「出来ない事も多くなってしまったけれど、変わらずできることもたくさんあるよ。」
と言って、片手で簡単な料理をしたり、一緒にゲームをしてくれたりします。

私は、祖母の車いすを押して歩くのが好きです。段差や、狭い場所を通るのは少し大変ですが一緒に歩く時間が楽しいです。でも、その時に他の人から好奇の目で見られることがあります。「あんな姿」と言った人と同じ視線でその視線には色々な気持ちが含まれているように感じて、悲しくなることもあります。しかし私は、その度に祖母の言葉を思い出します。

「どんな体でも、笑って生きていればそれでいい。」

祖母は、障害があっても毎日を楽しむ方法を知っています。どんなに時間がかかって一人でもなんでもやり切ります。だから私は、人を見かけで判断しない人間になりたいと思います。

人権とは、誰もが平等に尊重されることです。祖母が障害をもっている、祖母が祖母であることに変わりはありません。そして、私にとっては、車いすの祖母も、元気に走り回っていた頃の祖母も、同じくらい大切な存在です。人を「あんな姿」と一方的に決めつけるのではなく、その人の気持ちや努力を理解しようとする事が、人権を守る第一歩だと思います。

これから先、私は祖母と一緒に色々な所に出かけたいです。そして、もし誰かが心無い言葉をかけても堂々と胸を張ってたいです。

「私のおばあちゃんは素晴らしい人です。」

と言えるように、人権を守ることは特別なことではありません。目の前にいる一人一人を大切にすること。それを忘れずに生きていきたいです。